

---

# ぼてちはコンソメ・右パンチ！

沙月涼音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼてちはコンソメ・右パンチ！

### 【Zコード】

Z4775F

### 【作者名】

沙月涼音

### 【あらすじ】

格闘技とポテチが好きな志保。そこへ金髪美少年が現れた。彼は志保に幽霊退治をしてくれと懇願するのだが……。

## 第一話 新手のストーカー？

ふう、やっぱ休日の夜は立ち技最強が最高ね。私はベッドに寄り掛かりながら、小さなテーブルに置いたポータブルDVDプレーヤーで、アンディさまの試合に興じていた。左手には大好物のポテチを持ち、右手で頬張る。

私は一つのポリシーと言つか、こだわりがあった。それは、ポテチは『袋』という事だ。ポテチには袋と容器に入った物が存在しているが、やはり『イモ』本来の姿を残す袋にそれが、あるべき姿なのだと確信していた。

「よつしゃあつ！」

アンディの踵落としが炸裂し、相手がマットに沈んだ。何度見ても、この技は芸術だと思っている。そして、何度見てもドキドキしてしまう。結果が分かつていてもそうなるのは、やはりアンディの凄さだって感じた。

視線を画面から逸らし、正面にある壁掛け時計に向かた。時間は深夜一時十一分、そうデジタルは告げていた。電波時計である、狂いはないだろう。草木も眠る丑三つ時？ そんな事は構わず、私は右手を袋に入れた。

「あれ？」

左手を目線まで持ち上げ、袋の中を覗いた。イモの形を成した物はなく、そこには破片と呼ぶに相応しい物しか残っていなかつた。私はそれを数回に分けて口の中に放り込み、次の袋に手を伸ばした。その時だった。

「そんなんに食べると太りますよ」

「余計なお世話よ」

「はい？ 条件反射的に反応したけど、この部屋つて私だけよね？ 気のせい？」

「そんな、折角心配してるのに」

やつぱり氣のせいじやない。確かに私じゃない誰かの声が聞こえた。

そう、それは 私の背後。

私は、身体を少し左に捻り、首はもつと限界かつて位に捻り、ベッドの方へ向けた。

と、そこには……「！」

「こんばんは、志保さん」

についつと微笑む『彼』 そう、推定十四、五歳の美少年が正座していた。髪は金色、瞳はブラウン。私より綺麗かも……って、何考えてるんだよ、私は。

瞬間、これは現実か？ と思い、一回向き直り冷静になるよう努めた。が、その美少年はそんな私の意志など尊重せずに、向き直った私の眼前に位置を変えた。

「無視しないで下さいよ」

無視する気は更々無い。ビックリとかと言えば、夢であつて欲しいと思つてる程だ。

少年はテーブルの向こう側で、わざと回じよじよことと正座している。私はジッと目を瞑らしてみたが、やはり現実に『彼』が見えていた。

心臓が喉から飛び出しそうって感じは、きっと今だ。

そして、心底驚いた時は、本当に言葉が出ない。悲鳴さえも……。私の口はきつと、フナかコイかつて位に、ぱくぱくと口を開閉してゐに違ひないと思つた。

「あのう、志保さん？」

少年は小首を傾げ、私を見つめる。えつと、たぶん彼は幽霊か、またはそれに準ずる何かだ。普通なら、絶叫して助けを求めて、そ

んでもつて……えつと、そう、逃げ出すんだろうけど。その風貌がそれを許さない。次第に落ち着き始めてさえいる。

何故？ それは、彼が美少年だから。ああ、何て単純な私。ああ、美しさは罪だ。

「あの、志保さん？」

彼が再度私の名を呼んだ。私は咳払いを一つし、

「えつと、アンタ誰？」

「やつと反応してもらえた」

「仕方なくよ。仕方なく」

私の言葉に、少年は少し苦笑いを浮かべた。そこも、可憐い。

「えつと、僕は見ての通り幽霊なんですが」

「そのようね」

「驚かないんですね」

「十一分に驚いたわよ」

人生初体験よ、こんな事。幽霊も美少年も　出来れば、生きてる時に会いたかったわ。

「で、早速なんですが」

ちょっと待て、何だその『早速』という始まり方は、普通自己紹介が先でしょ？ それに何でか知らないけど、私の事は知ってる風だし。そして、私はアンタを知らない……もしかして、ストーカーつて奴？ そうか、私つてば、知らないうちに美少年幽霊にストーキングされてたんだわ。初めてのストーカーが幽霊つて　複雑。私はその少年を指さし言つた。

「だから、アンタ誰よ」

一瞬、きょとんとした少年は、次に「ああ」という瞳の輝きを放ち、全てを理解した感じで、

「僕はぴゅう太（仮）と言います」

「何よその、八十年代に登場した日本語でベーシックが書けるとう、珍ピューターみたいな名前は」

「おや、お若いのによくご存知で」

そう言つアンタも十分若く見えるけど、それとも見かけは十代でホントはおっさんとか？ いやあ～つ、それだけは許して。私の夢を壊さないで。

「変な名ね。それに何よその（仮）って」

「え？ その、本名は明かせない規則になつてまして」

ぴゅう太は金髪を右手で触りながら、申し訳なさそうに笑つた。幽靈でも可愛い。

「で、何しに出てきたわけ？」

「そうやつ、それなんですが」

正座を崩す事無く、ぴゅう太の目が真剣モードに切り替わつた。ああ、こんな瞳に見詰められて告白されたら、即、OKって親指立てちゃうんだけどなあ。

「実は志保さんにお願いと言つたか、協力をして欲しくて」

「お願い？」

「そう、僕の為に幽靈退治をしてくれませんか？」

「はあ？」

確かに私は格闘技が大好きだし、身体も鍛えてる。そんなんだから、未だに恋人も出来ない つて、そんなのほつといてよ。で、今では敬愛するアンディの踵落としも習得した。靈感もそれなりにあるし、まあ、だから彼も見えてる訳なんで。

でも、そんな私に幽靈退治ですつて？ ああ、ずえ～つたいたい無理。「あ、退治と言つても正確には浄化というか淨靈なんですが」

「無理」

「え？」

「残念だけど、他あたつて」

これは苦渋の決断と言つてもいいわ。美少年と幽靈退治。幽靈だけならまだ許せたんだけど。

「そんなん、志保さんにしか出来ないんですよ」

ぴゅう太は、フツと中空に浮くと、テーブルを素通りして私の目前で止まり、両手を会わせて懇願する。

お願い、そんな目で私を見ないで。決意が乱れるわ。

「何も私じゃなくても、出来る人沢山いるでしょ？」

「そりや靈力の強い人はそれなりにいるのですが……」

「じゃあ、そっちでもいいじゃない」

「でも、必要なのは靈力だけじゃないんですよ」

「はい？」

「相手を倒す力も必要なんです」

「力って、まさか物理的な……」

「御名答、流石、志保さん冴えていますね」

左の人差し指を立て、また笑うびゅう太。

えつと、その話を総合すると。私が彼に協力して、身体を張つて、持つてる靈力を使い、幽靈退治をする と。

「やっぱ、無理」

「え～っ」

「大体、そんな事出来るわけないじゃない」

「出来ますよ」

「出来ない」

「大丈夫ですって」

「絶対に無理」

「じゃあ試しにやつてみます?」

「はい?」

試しにやるつて? 何を? 幽靈退治を? 幾ら私好みの美少年だからって、度が過ぎるわよ。

そんな事を考へてる私を余所に、ぴゅう太はテーブルの上に移動した。やはり正座はそのままに、一見外人に見えてしまう彼が正座してゐる姿は、少し違和感がある。ま、幽靈だからテーブルは壊れないからいいけど。そして、ぴゅう太は自分の膝の上で両手をかざし始めた。すると、その手はボワッとした白い光に包まれ、何かの形を成してきた。

猫だ。それもちょっと小さい。子猫?

ぴゅう太がその子猫の頭を、愛おしそうに撫でると手を伏せた。

「可愛いわね」

「この子は、先月交通事故で轢かれてしまつて……」

「あ、ごめん」

「いいえ、いいんです。それより、志保さんの力で、この子を空に帰してもらえませんか?」

「え?」

「言つたじやないですか。貴女にはその力があるつて」

「ジコリ微笑むぴゅう太。可愛い……じゃなくて。空に帰す?

私が? あはは、この冗談を、と思いながら彼を見る。子猫を抱いたまま、ジッと私を見ていた。

取り敢えず笑つとく?

「あははは

つづく

## 第一話 子猫と握り拳！

愛想笑いを浮かべてはみたが、一人と一匹はくすりとも笑わない。そりやそうか……なんて思つてみても後の祭り、いやあその視線が痛いわ。お願ひだからそんな日で私を見ないでよお。

ああ、そんなに見詰められると……見詰められると、胸がキュンしちゃう。え？

「か、可愛いわねえ、この子」

私はぴゅう太の膝で身体を丸める子猫を抱き上げようと、手を伸ばした。

そもそも、触れるかどうかなんてその場では分からなかつたけど、自分の気持ちを悟られない事が目的。

「あ、志保さん。お止めになつた方がいいかと……」

ぴゅう太が言つのも聞かず、子猫を抱き上げた私。

「にやあ」ひと鳴きして、私に飴玉の様な瞳を向ける。さやあ、可愛い過ぎる。

前足の脇を両手で包むように、優しく掴み。目前まで持ち上げる。当然、後ろ足はダランと下に伸びるわけ。そつ、お腹は無防備つて感じ？

そんでもつて、必然的に視線は上から下にいく……「ひつ……」言葉が出ないといつのは、いつ言つ事なのねえと身をもつて学んだ瞬間だった。

「だから言つたのに……」ぴゅう太は、私から視線を外し下を向いた。

私はと言えば、まだ硬直状態が続いていた。出来る事なら、抱き上げる前に再起動出来たらどんなに良い事だろう。そつ、思わずにはいられない。

で、何が見えたですつて？ いいのかあ、これってホラーじゃないよね？ 取り敢えず、搔い摘んで話すわ。

ぴゅう太は、この子猫は事故で死んだと言っていた。上つ面が大丈夫つて事は？ もう分かつたよね？ 子猫の腹部が……。

私は一つ深呼吸をすると。まぶたをゆっくり閉じた。そして……。

「きやああああああつ！！」

これでもかつて位の悲鳴が出た。そして、抱いていた子猫を中空に投げ、立ち上がった。可愛いのにつて？ そんな事言える人は、現場を知らないからよ。

そして、右手に力を込めて、子猫をパンチ！ 正確にはまだやつてないから、パンチ体勢と言うべきね。動物虐待？ はいはい、これが生きてたのならね。第一死んでるんだもの、大丈夫でしょ？ ほんの数秒、その場がスローモーションの様に時が流れた。ミルクの王冠とか見たことあるけど、あれって不思議な感じがするのよねえ。

でもつて、私の腕を離れた子猫は、天井レスレスからゆっくりと降下を始めていた。

私は少し身体を低くし、右拳に力を込めた。

「いつ……やあああああつ！！ 嫌過ぎるうう！！」

叫びながら、握った拳を斜め上四十五度方向に向け放つた。

「にやあ？」

子猫が嬉しそうに笑つた。いえ、そう感じたの……笑つたつて。右手が子猫の身体を捉えた。特に感触は無かつた。重いとか、痛いとか、そんな風な感じは全然無かつた。ただ、その子に触れた瞬間、光が出た。青白いというか……そんな感じの光が出たの。

そして、子猫は消えた。そう、何事もなかつたかのように……跡形も無く。

暫し呆然として、私は立ち尽くした。右手も何か力が入らない。痺れてるつて感覚が襲つていた。

「ね、出来るつて言つたでしょ？」

ぴゅう太が静かな声で言つた。正座は崩さず、微笑みながら。首と視線を彼に向け、私はその場にへたり込んでしまつた。

これって。

テーブルを挟んで、私とぴゅう太は向かい合わせに座っていた。

「理解して頂けましたか？」

「えつと……これは夢よね」

「まだ、そんな事を……」

だつてさあ、幽霊退治なんてさあ。昔の映画じゃあるまいし、掃除機とかでパパアーッって訳にはいかないんでしょ？ 呪われたらどうする訳？ それ「セミイラ取りが何とやらじやなー」のさ。

「ねえ、一つ聞いていい？」

「何でしょう」

「その、幽靈退治は……その、あなたも一緒にやるのよね？」「ん~時と場合によるでしょうか

「はい？」

「何よれ！ それじゃ下手したら私一人でやんなきやならない事もあるつて事？ ん~。

「やつぱ無理」

私は開けたばかりの薄塙ボテチを摘むと、お茶を手にした。やっぱ茶請けにはボテチよねえ。はあ、和むわあ。

「えつと、寛がないで頂けますか？」

「いいじゃない、私の部屋なんだから」

「いいですか志保さん」

「な、何よ」

急にぴゅう太が私の目前に迫ってきた。綺麗な顔が数センチの所にある。キス出来ちゃうくらいに……。

「志保さんは出来るんです。僕はあなたの助けが必要なんですよ

「そりは言つても……やっぱり怖いものは怖いよ」

「僕が守ります」

「え？」

真剣な眼差しで私を見つめる彼。マジで？ 私を守ってくれるの？ ああ、年下とは言えこの力強い瞳。やっぱ生きてた時に逢ったかつたわ。

「だから、お願ひします」

「まあ、そこまで言われちゃ……私も無下には出来ないけど」  
やばつ、下心みえみえ？ うつん、そんな事ないわ。これは人助けよ、人助け。私はそう自分に言い聞かせた。でも、顔は赤くなつてるんだろうなあ。

「本当ですか？」

「取り敢えず、話は聞いてあげるつて事よ」

「え？」

「だつてさ、ドリゴン退治とかやらせねたら困るでしょ？」

「それは……無いと思こますよ」

「そうなの？」

「ええ……」

その後、ぴゅう太から衝撃的な内容を聞かされる事になるのだ。

つづく

## 第三話 週間・死者名鑑ベスト一

ドラゴン退治はしなくても良い訳ね。それは助かるわ……って言つてもまだ引き受けたかどうかは保留よ。まあ、彼と一緒にいれるならつて思うと、気持ちは揺らいではいるけど。

で、私達は改めて向き直った。ぴゅう太はコホンと咳払いを小さく一つした。少しワザとらしい感じはしたけどね。

「それじゃ、これから本題に入りますね」

「ええ、いいわ」

「まずは、これを見てください」

と言つて彼は私の目の前に、一冊の本をテーブルに置いた。大きさは……そうねえ、四用紙位かな。よく分からぬ模様の表紙に、漢字でこう書かれていた。『週刊・死者名鑑ベスト一』と。

「えっと、何ですかコレ？」少し引き気味の私に、ぴゅう太は、「見ての通りですが」とにっこり笑う。

「ああ、可愛い。じゃなくて、死者名鑑て何！？ つか、これって週刊？ 週刊誌なわけ！？ ありえない～い！ あの世も変わったわねえ。

「そうじゃなくてっ」私は引いた身体を前に戻し、その本をペシペシ左手で叩いた。

「この本が何かつて事ですか？」

「そう、その本とあなたの願いと何か関係あるわけ？」

「それが大ありでして……えへへ」

えへへつて、あ～た。その照れ笑いは反則よ。抱き締めてもいいですか？

「どうしたんですか？」

「へ？ と、取り敢えず、話の続きを聞かせて」

慌てて話を元に戻す。ぴゅう太は「それじゃ、最初から」と言って姿勢を正した。

「僕が閻魔大王に課せられた……」

「ちょ、ちょっと待つて」

「何でしょう?」小首を傾げるぴゅう太。

「閻魔さまって実在の人物なわけ?」

「そうですけど、何か?」

「何か? ジゃないわよ。そりや私だつて、閻魔さまの名前くらいは知ってるわ。地獄の最高責任者で、嘘吐きな輩の舌を抜いて……それからあ、罪人を地獄の各部署へと放り込む。誰も逆らえない絶対者。それが本当にいるなんて……会つてみたい。」

「あのう、続けていいでしようか?」

「あ、ごめん。続けて続けて」

「課せられたポイントは一五 ポイント。これは、僕が地獄に墮ちないで済む最低のポイントです」

「ポイント?」

「そうです。今の地獄では、最後のチャンスと言いますか……そんな制度が施行されたのです」

「それがポイントってわけね」

「そうです。これは、現世で彷徨い歩く、成仏しきれてない靈を淨靈又は除靈する事で貯まつてゆきます」

「まさかとは思うけど、ポイントカードとかあるわけ?」

「まあ、似たようなものは」

「あんの!?」

「ええ、これですけど」言つて取り出したのは、一枚のカード。それには『地獄の脱線しては駄目だよカード』と書かれていた。地獄つて案外ポップなノリなのね。

「はあ……まあいいわ。それで? 私に協力して欲しいと?」

「はい」

「で、それは良いとして」

とは言つたものの、それもこれも良いわけじゃないわよ。まずはポイント制の地獄はさておきつて事だかんね。

「『』の本は何なわけ？」私は置かれたけつたいな本を指差した。だいたい何なの？『』のふざけた名前の本は、あの世の人人が泣いてるわよつたぐ。

「そう、良い所に気がつきましたねえ志保さん

「そ、そつかなあ」って、何で私が照れ笑い？

「で、このポイントを得る為の目安になるのが、この本なのです。この本には、原則先週中に亡くなつた方の名前や住所、職業、年齢。所謂、個人情報が記載されています」

「そ、そつなの？」地獄じやあ個人情報保護つていつのは無いわけね。

「そして、それは難易度によってランク分けされ、それにポイントが割り振られています」

「もしかして」

「そうです。上位程難易度が高く、そして高ポイントを得られるつてわけです」

極めて爽やかに笑い、そして自慢げな彼。もう、私が協力する事が前提？

「じゃあさ、地道に小さいポイントを貯めていけばいいんじやないの？ それなら私の助けもいらないし、何より楽だと思つけど。そりや、数はこなさないとならないけどさ」

取り敢えず、何としても阻止！ 我ながら建設的かつ合理的な意見が出たわ、うん。

「それもやり方としてはアリです。でも、それだと時間がかかり過ぎるんですよ」

「いいじゃない、ゆづくりやれば」

「実はそもそもいかなくて」

「どうしてさ」

「一週間の期限付きなもので……はははは」

「な、何よそれ」「流石地獄、そんなに甘くは無かつたかあ。やるな閻魔ちゃん。」

「それで、やつてくれますよね?」

「はい?」

「幽霊退治」

綺麗な金髪が揺れ、ぴゅう太が微笑む。はあ、もう負けそ……ううん、まだまだ怖いのは御免だし、もう少しうと詳しく述べてからにしよう。

「ま、まあ慌てないでさ。その本を見せてよ」

「良いですよ。さあ、遠慮なさらずに」「ぴゅう太がその本を押し出す。

「そ、そう?」

私は恐る恐る『死者名鑑』なる週刊誌を開いた。

トップページは特集記事で『華麗な死に様』と題して、人生を謳歌した人物の事が四ページに渡って書かれていた。流石、四ページつてのにこだわりを感じるわ。

その次が肝のランディングページ。ベスト一と言つだけあって、ずら~っと名前が並んでいた。ぴゅう太が言つた通り、一人一人にポイントが割り振つてあつた。ただ、私が思つていたのとちょっと違つていて、個人のポイントがバラバラだつた。当然、一位の人があー点だと思つていたのに、そうじゃないんだ。

「ねえ、このランキングって誰がどうやつて決めてるの?」

「えつと……確かに、専門の機関があつて。日々亡くなる方の死に様を参考に決められてるとかどつとか」

「死に様?」

「そうです。全国で多くの方が亡くなるのに、全ては網羅出来ないでしょ?」

「そ、そうね」言われてみればそうだわ。死者全員なんて入れたら、とんでもない数になっちゃうでしょうし。にしても死に様が参考だなんて、一位の人は一体どんな死に様だったのかしら。

私は興味が沸き、その気になる一位の人物の欄に視線を向けた。  
が……。

「ちょ、ちょっとお

「どうかしましたか？」

「どうかじやなくて。ベストテンの人達って、死に様詳細無いわけ  
？ 他はあんのに」

「え？ ああ、それは見つけてからのお楽しみって事になつてます  
彼はひょいとそのページを覗き込み、笑いながら言った。

お楽しみって、宝くじかってえの。

「でもさあ、そもそも現世に留まつてるつて事は相当この世に未練  
があるわけでしょ？」

私は開いたページもそのままに、腕を頭に組んで天井を仰いだ。

「ええ」ぴゅう太は変わらず冷静な返事。

「て、事わよ。皆それぞれ執着心があるつて訳じゃん  
ですね」

「呪われたりしないわけ？」

天井から視線と共に顔と身体をぴゅう太に向けた。

「さあ……」肩をすくめ、彼が答える。

私の背中に悪寒が走った。

「やっぱ無理」

「大丈夫ですって」

堂々巡りの末に、丸め込まれそうな微笑がそこにはあつた。

つづく

## 第四話 私の右手が真っ赤に燃える！

夜中の街は車通りも少なくて、何かちょっと怖い。ましてや、私みたいな美少女なんて下手すりや変態に襲われかねないわ。

何て事を言つたら。ぴゅう太は「大丈夫です」ですって……。それは何？ 私なら襲われないって事？ それとも、守ってくれるつて事かしら？ と、続けた。「いえ、志保さん強いですから」……。私を守るつて話は何処いつた！

何だかんだで、結局手伝う事になつた私。そんでもつて、早速出ようと誘われた。深夜に美少年とデート……まあ、それも良かつたんだけど、時間も時間だったから明日にしてとお願いした。第一、徹夜はお肌に悪いもの。

で、翌日深夜未明。手伝うと決めた以上、キッチリ決める。私達は、街からちょっと離れた国道沿いに立つていた。今はランディング七九位の男性を探している。何故この人が選ばれたかと言えば、あのランキング本。私は、出来るなら下位の奴から順番について言つたんだけど。下位の死人で浄化しやすいから人気があるんですって。

つたぐ、考える事は皆一緒にねえ。

ん？ どうしてまだ浄化されてない人が分かるのかつて？ そうよねえ、私も最初は不思議に思つたんだけど。どうやらこのけつたいな本、オンライン機能がついてるらしくて……もう、これだけでも画期的なんだけどさ。だって本よ、本。普通の本なんてこんな機能あるわけないじゃない。でね、浄化されたと同時に、該当する人物の欄が黒く反転する仕組みになつてるんだって。あの世の方がIT文明発達中つて感じ？

田の前にある国道は、片側二車線で中央分離帯がある。探している男性は、その分離帯に衝突して死亡した。と、そう記載された。私は本を片手に、そのページを開いて辺りを見回していた。

「ねえ、ぴゅう太」私は左隣に立っていた彼に言葉をかけた。

「何でしょう？」

「この人って、事故死なんだよね？」

「え？ 違いますよ」

「うそ！」

「ちゃんと本に書いてありますよ」

「何處にさ」

「死に様欄です」

相変わらずの微笑みでぴゅう太は言葉を返す。私は改めてランキング欄を見返した。確かに、個人情報の横に彼が言う死に様欄はあつた。それにしても、この本てやっぱ『とんでもない』本だわね。取り敢えず、その欄に視線を落とす。『自殺』……そこにはそう記載されていた。

「自殺？」

「ええ

「自殺ねえ……」

中央分離帯にぶつかって自殺だなんて、よっぽどの事があつたんだろうか。私達は並んで郊外に向かつて歩いた。傍から見れば私人だけが歩いているように見えるんだろうな。なんて思いながら。手に持つた本には、肝心の場所が記載されていない。全てにおいて付近とだけ書かれているだけだった。つたく、ここが一番の肝じやんか。ケチくさいわねえ。私はこの疑問をぴゅう太にぶつけた。

「ねえぴゅう太？」

「今度は何ですか？」

「何で詳しく載つてないの？ 死んだ場所」

「え？ ああ、それは宝探し的要素を盛り込んだって聞きましたよ

「またいらんことを……」私は呆れるのと同時に溜息をついた。

程なくして、中央分離帯のセンターポールがくの字に折れている場所を見つけた。路面には引きずった跡に、分離帯の中にあつたであらう土がこぼれていた。

間違いない、事故の跡だ。

「ねえ、あそこじゃない？」右斜め前方を指差す私。

「え？ ええ、案外当たつてるかもしませんね。行つてみましょ

う

パツと明るい表情になつたぴゅう太は、スッと浮くと鳥のように飛んで行つてしまつた。

「ちょ、ちょっと」私にはそんな芸当出来ないわよ。

長さにして十数メートルだろうか、分離帯の中にはYの字になつた銀色の鉄柱が一本、それぞれ果物がぶら下がるようにオレンジ色のランプが取り付けられていた。

私達は中央分離帯の傍で事故の痕跡を詳しく調べた。道路のえぐれ具合やポールの折れ方。そして、彼の有無。きっと間違いない、予想は確信へと変わつていつた。

私は折れたポールの傍で意識を集中させた。

すると。

「志保さん。あれ」ぴゅう太が静かに言つた。

私は閉じた目を開き、視線を五メートル程先の街灯へと向ける。何か黒いものが見えた。そしてそれは、次第に形になつていつた。人だ。

「どうやら、彼のようだね」

「そのようですね」

その影は形を成し、一人の小柄な男性の姿になつた。顔は細面、瘦せ型、髪の毛は短く少し薄い。何より特徴的なのは、チョビ鬚を鼻の下に生やしていた。

スケベそう……。

これが私の第一印象だった。

と、同時に思った。

こいつなら勝てそう。

「ねえ、あの人人がそなうなの？」

「だと思います」

「まあ、取り敢えず挨拶でもしてみる？」

「問答無用でやっしゃつてもいいですけど」

さらつと言うぴゅう太に、私は一瞬戸惑つた。そりやそうでしょう、いきなりつてのはさあ。いくら相手が幽霊でも失礼なんじやないかなつて。でも、ぴゅう太が言うには「現時点の彼等には理性はありません。言わば身体を持たないゾンビなようなもの」だから、話し合いみたいな平和的解決はほぼ不可能なんですって。下手に挨拶して気付かれたら、それこそこっちがピンチに陥つて面倒な事になりかねないそうだ。

そう言つ事だから、私達は静かにゆっくりと目標へと近づいていった。それも後ろから回り込むようにね。卑怯？　いえいえ、奇襲も立派な戦略！

目標を二メートルに確認。ここからなら一気に畳み掛けられる距離だわ。幸いにして『彼』はまだ気が付いていない様子だった。立っていた『彼』はコンクリートブロックの上に座つて俯いていた。そこだけ切り取つて見ると、とっても寂しそうなオッサンなんだけどなあ。

それを私は除霊していくのよねえ。しかもぶん殴つて……何とも複雑だわ。

「志保さん。準備はいいですか？」ぴゅう太が小声で言う。

「ええ」私はぴゅう太に貰つた黒いグローブを右手にはめ頷いた。

因みにこのグローブ。指の部分は無くつて、しかも片方しかない。何でも私の靈力を増幅してくれる機能があるそうだ。

まあドーピングみたいなもんかな。

私は右手に力を込めた。三……一……一！

「ゴー！」一気に距離を詰め右手を引き靈力を溜める。田標も私に気が付くが、もう遅い。

拳に込めた靈力をぶつける為、今度は前方に突き出す。おっしゃ、仕留めた！

と、思ったのも一瞬。『彼』がぐるりと身を翻した。鮮やかすぎるくらいに、あっさりと攻撃を交わす。私はその横をするりと通り抜けた。当たるものだと思つて繰り出した攻撃だもんだから、バランスも崩した。両手を着き、四つんばいの形になつた。

「志保さんっ！」ぴゅう太の叫び声が聞こえた。

振り返ると『彼』が両腕を振り上げ私に襲い掛かろうと準備中。ま、まずい！ 私は右足で路面を蹴り、その勢いで進みながら立ち上がり逃げた。

冗談じゃないわよお。  
ドゴーンッ！！

轟音と同時にコンクリート片が背中に当たる。『彼』が腕を路面に振り下ろしたのだ。

「げっ」逃げながら振り返ると、道路の一車線に大穴が開いていた。ごめん、弱そうだつて言つたの、撤回するわ。だから、大人しく殴られてよお。

「ぐおおおおおっ！！」叫ぶ『彼

あは、やっぱ駄目？ だよねえ……。

このつ、暴走モードを何とかしなきや。私は五~六メートル程距離を取ると、奴に向き直る。

「志保さんっ！」ぴゅう太が街灯の上で叫ぶ。あんた、何処にいんのよ。

ふつと、一息吐き……私は奴を威嚇しながら作戦を練つた。

வாரு

## 第五話 あの技を叩き込め！

兎に角、暴れまくるちょび髭を何とかしなきや。

私はグローブを左手で整えた。

「よしつ」短く気合を入れ、ダッシュした。

ちょび髭との距離が一気に縮まる。

奴の腕が届かない所で、私は体勢を低くし懷に潜り込んだ。彼の右腕が頭上に降りかかる。私は同じ右手で受け流し、左でボディに拳を叩き込んだ。

「グホッ」短く唸る。

効いたか？

が、しかし。彼はくるりと身体を回すと、受け流した右手でバッタブローを仕掛けってきた。

腕が鞭のようにになり、私目掛けて飛んできた。

「ひつ！…」

私はかがんでそれを交わす。

つたく、危ないじやないのよ。

にしても、顔に似合わず素早いわね。長引かせるのは危険だわ。私は一旦後ろに跳ねると、右拳に力を溜めた。

「？」

あれ？ 力が入らない。

まさか……とは思つけど。

「志保さんっ！ 危ない！」ぴゅう太の声が響いた。

「え？」

気付いた時には遅かった。ちょび髭のパンチが左胸をヒットした。

「くつ」息が一瞬詰まる。

数メートル飛ばされ、私は尻餅をついた。

「胸が小さくなつたらどうすんのよつー」

悪態を吐きながら胸を押さえる。

おかしいなあ、絶対に届かない距離なのに。だが、その疑問はすぐ解ける。

ちょび髭の腕がダランと地面に伸びていたのだ。

ちょっとお、それって反則じゃない？ 腕が伸びるなんて、怪しげな坊主か能力者くらいしか知らないわよ私。

と、考える間に、今度は左足が伸びてきた。

「ひつ」

何なのよあれえ。地面を転がつて逃れたが、ここは車道よ、轢かれたら洒落になんないわ！

「つたくもう。何でもアリなわけ？」

立ち上がり再び右手に集中したが、やはり力が戻っていない。正確には靈力だが。

「ぴゅう太！」私は叫んだ。

「何でしょう」冷静な声が背後から聞こえた。

「素早いわね」

「僕も幽霊ですから」

「まあいいわ。ちょっと頼まれてくれる？」

「何でしょう」

「ぽてちを買つてきて」

「はい？」

「だから、ぽてちよ」

「言つてる意味が分かりませんが」

つたく、顔は良いのにぶちんねえ。

私は振り返り、ぴゅう太に向き直つた。敵に背を向ける危険性もあつたが、今はこっちの方が重要だつたからだ。

「ポテチよ。ジャガイモのお菓子

「ええ、それは分かります。でも、何故今なのでしょう？」

「力が出ないのよ」

「はい？」又も怪訝そうな顔のぴゅう太。

「だから、ぽてちが無いと靈力が出ないのつ

言つて、少しの間。

そして。

「ええええつ！！」反応遅つ。

「兎に角頼んだわよ。ハイこれ財布」

私はポケットの中の財布を彼に渡した。小銭入れで小さい黒いやつだ。

「買つと言つても、ここには店なんてありませんよ」

「ちょっと戻ればコンビニへらしあるでしょ」

「で、でも……」

「すべこべ言わすせつと行く」

「は、はい」

ぴゅう太はフワリと浮くと、元来た道を戻つて行つた。

「ふつ」私はまた短く息を吐いた。

さあて、ぴゅう太が戻つてくる間、何とかしないとね。

向き直りちょび髭の姿を捉える。相変わらず暴れまくつていた。

道路の片側は道路工事の如く掘られ、無惨に地面を晒していた。

私もドジを踏んだものだ。まさかここで力が出ないなんて。こんな事なら一袋全部食べとくんだったわ。

「ぐおおおおおつ！」

ちょび髭がまた雄叫びを上げた。地鳴りのよつな低く耳障りな声。

「つたくもう」

私は奴に向かつてダッショウする。靈力が出ないだけで、リアルパワーはまだあつたしね。少しでも被害を食い止めなきや。

何故つて？ 被害が大きいと大減点なんだつて。ただでさえ順位の低い幽霊なのに、ここに来て減点は更なる苦労を重ねなきやならないわ。

そんなの、「めんつて感じだもの。

今度は正面からではなく、後方からの攻撃に切り替えた。

まずは、正攻法の様に見せかけ正面から突つ込み、直前で左側へ

ステップ。バスケやサッカーで言うフットプリント？ みたいなもんね。横をかすめると同時に、彼の後ろ首元へ手刀をお見舞いする。

首から上が前方へと出され、彼は苦悶の表情を浮かべた。

やりい、手応えアリって感じ！

続けて振り返りざまに、彼の右足田掛け蹴りを食らわす。丁度膝裏の辺りだ。

ちょび髭は体勢を崩し、地面にひざまづいた。

「よしつ」

私はすぐさま正面に回り一メートル程距離を取つて、一気に加速。相手の片膝に飛び乗り、こめかみ付近へ膝蹴りを叩き込んだ。ちょび髭は地面に倒れた。

「ふつ、シャイニングウェーブード。久々に決まったわ」

私は足元の彼に視線を落とした。流石にすぐには立ち上げつては来ないだろう。だつて渾身の一撃だったもの。

と、思ったのも束の間。

ギロリと彼の瞳が私の方へ向けられた。

ぞぞぞつゝ。背筋に悪寒が走る。

ま、まじですか？ 普通ならあれでスリー・カウントなのよ。

危険を感じ、その場から離れようとした瞬間。左足首を掴まれた。しまつたあ！

奴は痛い位に掴むと、事もあろうに私を放り投げようとする。

ちょ、ちょっとタンマ！ 倒れたまま私を投げる気？

グイツと引き寄せられたかと思うと、ムチ打ちになるんじゃないかつて程の力で逆方向へ。

ああ、今私は鳥になつたわ……。

「きやあああつー！」 などと少女チックな悲鳴をあげてみた。

空が上、地面が下、そしてそれが逆になる。私つてば回つてる？ と、背中に強い衝撃が走つた。

気が遠くなる程の衝撃だ。受身失敗の背負い投げみたいな？ 兎に角苦しい。

あのちゅび髭強すぞよ。星が綺麗だわ。

と感じてる目前に、ぴゅう太の顔が登場！

あまりに近くだから、思わず首に手を回してキスを……なんて。

「大丈夫ですか？」

「え？　あ、あんまり」

「買つてきましたよ」

「おつ、「私は上半身を起こした。

「ハイ、これでいいですか？」

「おつ、「私は上半身を起こした。

「ハイ、これでいいですか？」

「ぴゅう太が手渡したのは、うす塩味だった。しまったあ、味指定

すんの忘れたあ。しかもビッグだしい。

「どうしたんですか？」

「な、何でもないわ。ありがと」

「いえ、お役に立てて何よりです」

言つて私はポテチを受け取り、封を切つた。食欲をそそる芋と油

のコラボ。

ん~いい感じ。

私はポテチを口に放り込み、無心で食べた。  
靈力が漲つてくる。

「よおし、いいわ。これよこれ！　いい感じ」

「やれそうですか？」

「ええ、次で決めるわ」

「頑張つてください」

「でも、次でダメなら。私降りるから」

「ええええっ！」

つづく

## 第六話 あの世のネット社会

呼吸を整え、力を右手に集中させる。

「行けそうですか？」ぴゅう太が不安げな言葉をあげた。

「ここで「行けそうな気がする」とか言った方が良かつたのかもしれないけど、却下。

手のひらにソフトボールだいの大きさの靈力が形成された。

「よし」準備は万端。後はちょび髭の隙が出来るのを待つばかり。長い腕を無茶苦茶に振り回すちょび髭。電柱のコンクリートが剥がれ、中の鉄筋がむき出しになっていた。

「ねえぴゅう太」

「はい？」

「損害つて自腹？」

「えっと、一応保険には入つてますが……下手打つと何割かは負担になるかも」

「なんですつて！」

何て事なの、ここで停電なんて事になつたら洒落になんないわ。

私は暴れるちょび髭に向かつて叫ぶ。

「ちょっと五郎！ それ以上壊さないでよー！」

「あのう、志保さん？」

「何よぴゅう太」

「誰ですか？ 五郎つて」

「奴に決まってるでしょ。小毛里五郎」

「またそんな危ない名前を勝手に付けて……怒られますよ」

「兎に角、危機感出てきたわ」

「それは、何より」

五郎の両腕がしなり空を切る。道路標識が真ん中からぐにゃりと折れた。

「ああ！」と叫びつつも、五郎の隙を私は逃さなかつた。「今だ」

靈氣はそのままに私は飛び込んだ。五郎の左腕が私に向かつて振り下ろされる。

「遅いっ！」私は左に避け、更に深く懐へ。

「必殺つ、ヒクストレイルつ！」右手の靈力の玉を、五郎のみぞおちへ叩き込んだ。

五郎はぐの字に身体を折ったかと思うと、バネが伸びたかの如く後ろへ仰け反りこれ以上にない位の咆吼を上げた。

「やつたか」私は三歩下がり五郎を見た。青白い光が五郎を包み、無数の螢が飛び交っているのではないかと思わせる位の光が夜空へ上がつてゆく。

「やりましたね、志保さん」

ぴゅう太が私の後ろで言つた。こいつ、いつの間に……。

「はあ、めちゃ疲れたあ」

私はベッドの上に身体を投げ出した。

「お疲れ様です。志保さん」

「なつ」眼前に美少年の顔があ。私は慌てて身体を起こした。その動きに合わせてぴゅう太も動く。

「次もお願ひしますね」美少年が微笑む。かあいいねえ……つて触れないのはネックだわ。

「で、今日ので何ポイント位なの？」

「下位ですかねえ。さほど多くはないかと思いますよ。知りたいですか？」

「そりや、まあ……でも」

「えつと……」ぴゅう太が手帳を取り出しページをめくつた。

「あ、やつぱい。今日はもう寝るわ

「え？」

知りたかったけど、疲れと眠気が限界。それに明日知つてもポイントが増えてる訳じやないし。私、学生だしね。

「じゃ、おやすみ」

「はい？」

呆気に取られたぴゅう太の顔がぼんやりと見えたが、私は深い海へ沈むような感覚で眠りに落ちていった。

目覚ましの電子音が頭上で鳴り響いていた。目蓋がおもたひてか、身体全部が重たい。ベルの音を止める気力も湧いてこなかつた。だが、容赦なく電子音は鳴り続けた。しかも段階を追うごとにその音量を上げてゆく。迷惑な話だ。

「ん～んっ！」私は暫く聞き続けたが、最大音量の一歩手前で耳の限界点に到達。仰向けになつたまま、目覚まし時計を右手で叩いた。「痛っ」手の甲がスイッチに当たつた。そりやそうだ、体勢は背泳ぎだったんだから。目覚ましも相まって、その刺激で更に目が覚めた。

「おはようございます。志保さん」

「おはよっ」と、反射的に答えてしまつたが……ちょっと待て。

私は身体を起こし、声の主を捜した。

「あ～！」そこに居たのはぴゅう太だった。「あんた何故ここに？」

その問いに彼はにこやかに微笑むと言つた。

「まだ終わつてませんから」

いや私が聞きたかったのはそうじやなくて。

「何で朝なのに居る訳？」

「はい？」

「だつて、そうじやない。幽靈と言えば夜。これは定説よね？」

「はあ」

「なのに、何故にあんたはそこに居るー」

「禁則事項です」

「それに……どうして私の机にあなたの私物がつ」

私はベッドから出るなり机を指差し言つた。そりやごくたまにしか勉強しないとは言え、そこは私の机。その机上に見たことの無

い機械が置かれてたら誰だつて怒る。

だが、ピュウ太は再び微笑み。

「あ、これですか？　これはMN80B」そつ悪びれる事無く答えた。

「そうじゃなくて」つたく調子狂うわ。

「ああ……これは、パーソナルコンピューターについて

「え？」

「キーボード、モニターが一体となつた画期的なマシンです。しかもデータ保存用にカセットテープが内蔵されているといつ優れもの」

白邊げに説明する彼。軽い頭痛がしてきたわ。天然？

「それくらい私にだつて分かるわよ」

「志保さん、このマシンをご存じで？　流石ですね」

「そうじゃなくて、私が言いたいのは

「ん~何が問題なのでしょう？」

「はあ、まあいいわ」

「変な志保さん」

つたぐ。あんたが美少年じゃなかつたら、真つ先に成仏させてやるのに。

「で、その変なパソコン。何に使うわけ？」

「これですか？　これはあの世との通信に使うんですよ

「通信？」

「ええ、この世の言つとこのインターネットでしうが

「はい？」クラッヒ来たわ。あの世のネット社会つて一体。

「これでよし」

ピュウ太は、準備の出来たパソコンの電源を入れた。微かなノイズと共にモニターが反応する。

グリーンモニターですかっ！

六  
六

## 第七話 お得な三姉妹？

その事実を知ったのは、私が学校から帰つて間もなくだった。え？ 学生だつたのかつて？ こっちの方が衝撃的事実とか言わないように。いろいろとイメージしてくれてた人もいるかなつて思うけど、これでも17歳。

で、衝撃的事実だけど。それは、帰宅して机の上に置いてあるパソコンを、ちょっと興味本位で触つてた時に判明した。

本体一体型なんてそう珍しくもないんだけど、グリーンモニターに力セットよ。触りたくなるつてのが人情つてもんでしょう。ぴゅう太の話だとあの世に繋がつてるつて言ってたけど、回線も繋がつてる節もないし……誰だつて不思議に思うはず。

でもつて、電源を投入。数分後に画面が表示された。ランギング画面と獲得ポイント。昨夜倒した『五郎』が載つてた。

「あつたあつた……どれどれ」  
指を画面の端へ持つて行く。

「なんですか？」

ありえない、あんなに頑張つたのにこのポイントはありえないわ。何なのよ九ポイントつて。あの本じゃ一ポイントは貰えたはずなのに。

「どうかされましたか？」

「ひつ」

つたく毎度毎度、この美少年は……。

私が振り返るとそこにはぴゅう太が目を細くして微笑んでいた。

「ちょっとぴゅう太」

「はい？」

「何なの？ このポイントは」

「いやあ、見ちゃいましたか……へへへ」

「へへへ……じゃないつての。今日はその笑顔には騙されないわよ。

あんなにやつたのに、下手したら死んじゃうといだつたのよ。なのにい。

「詐欺だわ」

「そんな事ないですよ。ポイントは厳正な審査の上、決められるんですから」

「じゃ、これは何？」

私は画面のポイントを指差して言つた。納得いかないに決まる。

「ああ、これはですね……半分は志保さんが原因なんですよ」「はい？」私が原因で……「あつ」思わず右手を口に当てた。

「思いあたるでしょ？」

「まさかとは思ひけど、もしかして戦つた時に壊した……アレが原因つて事？」

「（）答

「（）」

私はその場でひざまずいた。認めたくないモノだ、若き故の過ちと言ひモノを……何て彼なりきっとそう言つただろう。

にしても、こんなに減点されるなんて思つてもなかつた。修繕費が請求されなかつただけマシって考えた方がいいのかもしれないけど。やっぱ納得いかないわ。

「で、次の相手なんですが……」

「え？」ぴゅう太の声が頭上から聞こえた。私の気持ちは関係ないのね。

私はようようと身体を起こすと、またもにこやかに笑う彼の顔があつた。一つため息をつき、緑の画面に視線を移した。

映し出されていた画面は、既に私が見た物とは違つていた。リスト形式なのは変わつていなかつたが、例の本と同じような感じって言えば分かりやすいかな。

「下位の方は結構消されちゃつたみたいだから、これなんかどうですか？」

消されたって、可愛い顔してサラッと言うわね。

「どれよ」ぴゅう太が指差した所に目をやつた。「無理」

「え～っ！ またですか？」

「アンタねえ、またつて言うけどこれは無理でしょ

「そんな事ないですって」

「そんな事あるって。だいたいいきなり三七位は反則でしょ

「大丈夫ですって、相手は女性ですし」

私が気にしてるのはそこじゃない。

「そうじやなくて、何なのよ。この三姉妹つて」

「いいでしょ？ ポイントも三倍ですよ。お得です」

「お得じやないって……」言いながら私はベッドへ向かい、腰を下ろし続けた。

「だいたい、下位の一人だつて苦戦したのにそれが三倍よ。赤い彗星じゃあるまいし」

「赤い何ですって？」小首を傾げるぴゅう太。

「え～っ知らないの？」

「ええ

あんなに有名な人を知らないなんて意外だったわ、私でさえ知ってるのに。ぴゅう太の言動や態度からして、めちゃ知つてもおかしくないと思つてたけど。

私は立ち上がり、左手を腰に、右手は人差し指を立て彼の勇姿を伝えようと口を開こうとした瞬間だつた。何かを思い出したようにぴゅう太が放つた言葉は。

「ああ、お父さんにもぶたれた事もないって人ですね」

「そいつはライバルだあ。そうじやなくて、赤い彗星つてのは」

「いえ、それはいいです」

「え？」すさま風が、私の胸をすり抜けた瞬間だつた。

ぴゅう太がキーを叩くとまた画面が変わった。ポイント三倍、お得意な三姉妹のデータを見てみる事になつたのだ。幽靈が操作出来る

パソコンを、私も触れるという不思議さ。ぴゅう太が椅子に座り、私は彼の右後方に立ち画面を覗き込んでいた。

「本当にやるわけ？」

「そのつもりですが」

いや、やるのは私なんですけど。苦笑してみたが、画面を凝視している彼にはきっと見えてはいなだろう。

「やるのはいいけど、今度はちゃんと戦力になるんでしょうね？」

「誰ですか？」ぴゅう太が振り返る。

「あんたよ」

「はい？」

他人事の笑顔に思考がフリーズ……不安過ぎるリアクションだわ。もしかしたら三対一も考えられる。それだけは絶対嫌、というより戦力的に無理でしょ。

「やっぱ降りる」その場を離れようとした私の腕をぴゅう太が掴む。

「大丈夫ですよ」

どうからそんな自信が来るんだよったく。

「兎に角、データはしかり覚えてくださいね」

「はあ」強制出動かいつ。

またもキーを軽快に叩くぴゅう太。小さな画面の中で次々にデータが移り変わつていった。結局、三姉妹とやる事になつてしまつた。

「場所は廃校」

「ありがちね。

「時間は午前一時から三時  
よく言つ丑三つ時ね。

「相手は三人。名前はユイ、ユマ、ユカ  
何か聞いたことがあるわね。

「三人は忍者の末裔で……」

「ちょっと待つて」

「はい？」

「それ大丈夫なの？」

「何がですか？」

「いえ、一人はマッポの手先とか言わない？」

「違いますけど」

「ならないわ」

「三人ともです」

「何ですって！」

勝てる気がしない。これなら、イレズミ三姉妹の方がマシって感じだわ。でも、サイコ何とかなんて私には無いし。

「ねえ、飛び道具とか使えないわけ？ 靈ガントか

「ん」志保さんのレベルが足りませんねえ」

「はあ？」

レベルって何、何時からロープレになつたんだよ。てか、私のレベルって今幾つよ。

## 第八話 廃校へ行こう！

夜中の学校つていうのは、どうにもこんなに不気味さが倍増するんだろうか。これで月が出てなかつたらバスしてしまった勢いだわ。私とぴゅう太は、三姉妹が出るという廃校に来ていた。雑草は生え放題、鉄の扉の校門は茶色に錆て、それを支える支柱は崩れ、扉としての機能を果たしてはいなかつた。

「不気味よねえ」

「そうですか？ 僕はよく見かけますよ」

幽靈に聞いた私が馬鹿だつたわ。軽く頭を抱え、私は鉄の扉に手をかけた。その途端だつた、僅かに軋む音がしたかと思うと大きな音と共に倒れてきた。

「きやつ」

「大丈夫ですか？」

私はとっさに後ろへ飛んだというのに、ぴゅう太はその場を動いてもいない。しかも、にこやかに笑っていた。つたく、大事なポテチ落とすどこだつたじやない。

「良いわね幽靈は」

「はい？」

小首を傾げる彼。嫌みの分からぬ男だ……。

私達は門をくぐり敷地内へと入つた。

校舎は三階建てで、正面に生徒用玄関があり左右対象に教室が伸びていた。玄関の上には校章があつたのだろうか、その跡が見受けられたが、今はもう無い。

正面玄関から向かって左側へ、私達は歩を進めた。廃校は付きものと言うべきか、窓ガラスの殆どは割られその破片は直ぐ下に散乱していた。板で多少打ち付けてあつたけど、それも意味をなしていないようだつた。一言で言うなら、もう帰してつて心境。

「今回は落ちつりますね」ぴゅう太が、周囲を見渡していた私に声

をかけてきた。

「え？ そんかな」

「ええ、そんな感じがしますよ」  
まさか、この雰囲気にビビッてたなんて言えない。いや、いつそ  
言つてしまつたら今回のミッション、辞退させてくれたかも。  
「と、取り敢えず正面に戻りましょう……って、あんた何してんの  
よ…」

「はい？」

ぴゅう太は、壁の中に入れた上半身を出し、不思議そうな顔で笑  
つた。つたくこの幽霊は……やっぱ私を家に帰して。

「じゃあ、正面から入りましょつか」

何事も無かつたかのようにさらりと言ひ。良い意味で緊張感が抜  
けるのはありがたいと思つけど、たまには私の意見も尊重してよ。  
「最初に見たけど、ドア開かなかつたわよ」

「大丈夫ですよ」

毎回毎回、どっからそんな自信が湧いて出る。大体、あの生徒玄  
関は入れないでしょ。板も打ち付けてあつたし、しかも鍵が掛かっ  
てた。

「私は壁抜けなんて出来ないわよ」

「ぶち壊せばいいんですよ」

「はい？」

「だから、板もろとも壊すんですね」

「誰が？」

「志保さんが」「どうやって」

「必殺技で」

「レベル不足です」

「後ろ回し蹴りで十分ですよ」

「怪我したらどうすんのよ」

「得意でしょ？」

「聞いたじゃない。そりや蹴り全般は得意だけじゃあ、時と場合によるわよ。

「てか、アンタ中に入つてカギ開けてきてよ。そしたら隙間から何とかして入るからさ」「そんな事僕に……出来ますね」

「でしょ」

苦笑いしながら、ぴゅう太の身体がドアの向こう側に消えた。つたぐ、何でも私にやらせようとする性格を何とかしてよ。

ほんの数秒待つていると、何の前触れもなくぴゅう太の上半身がにゅっと出てきた。

「！！」

「開きましたよ」

「脅かすんじゃないわよ！」

「すいません」そのままの格好で頭を下げるぴゅう太。

「つたく」

私は打ち付けられた板の隙間を、這うようにして潜り中に入った。生徒玄関を抜け、進入前に探索した教室側、つまり左へ折れた。中は薄暗く冷たい空気が私にまとわりついてきた。右手に教室、左手に窓。何処にでもある学校の風景。月明かりが、板で閉ざされた窓の隙間から入つて廊下を照らす。もう帰してくれなかな……私はぴゅう太をチラリと見てみたが「ん？」と言ひ仕草で軽く返された。

一步歩くたびに、割れたガラスの破片が足の裏で軋む。ああ、嫌なのよねえこの感じ……転んだら絶対怪我しちゃうし。あと、この音も嫌い。

「取り敢えず、一年生の教室に行きましょうか」

歩いてくる風のぴゅう太が言つてきた。私としては面倒なので、

「アンタ、端の教室から最後まで一気に抜けて見てきなさいよ」

「えへっ」明らかに不満な返答をするぴゅう太。何よその反応は……

……一つづつなんて、見てらんないつてえの。

「それこそ、ぴゅーつてすり抜けて見たらいいのよ」

「途中で居たらどうするんですか！」

「誰が？」

「例の三姉妹がですよ」

「靈のね」

「ウマイツ」

「ほり、とつとと行く」

左手を払うように、私はぴゅう太に指示した。

「ちえ」不満顔はそのままに、渋々近くの教室へとぴゅう太が身体を潜り込ませて行った。

月明かりで照らされた廊下に、私は腰を下ろした。出来れば『誰もいません』て言葉に期待したいとこだわ。ボケっと待ってるのもアレだし、ポテチでも食べよう。今日はちゃんとコンソメ味、持ってきたし。

封を開け、薄暗い中で袋を広げてみる。

「ん~このかほり。満足満足」

手を入れ一口。

「くはあ、やつぱポテチはこの味よねえ」

と、私が至福の時を過ごしてほんの数分。見慣れた顔がとんでもない勢いで近づいてくる。

「出た~っ！」

叫ぶぴゅう太。普通ならその台詞は私が言つべきだと、もう一口ポテチを食べながら思った。

「志保さん！ 出ました！」

更に叫びつつその顔が近づいてくる。血相までは流石に分からないけど、蒼白って感じなんだろうなあ。あはは……。田の前まで来たぴゅう太に、

「で、誰が出たの？」

「えつと、誰と言つか……」

「歯切れが悪いわね。はつきり言ひなさいよ」

「じゃあ、言こますけだ」

「けど」

「雑魚です」

「はい？」

「あちこちから流れ着いたといつか……えへへ」

「それって、三姉妹とは関係ないと？」

「まあ、そうなります」

「そう、関係ないなら別にいいわ」

「それが、そう言つ訳にもいかなくて」

「どう言つ事よ」

ぴゅう太が指差した方、つまり跳んできた方を見ると。何やら怪しげなうねりと言ひか、白い影が広がり始めていた。嫌な予感がするわ。

「まさかとは思ひなか」

「お願いします」

一囗りと笑つてぴゅう太が言つてのけた。

〔冗談じゃないわよ。あんな数相手にしてたら、本命の前にバテちゃうわ。〕

「嫌」と、つっぱねてみたけど。

「手遅れです」と、せらり。

「つたぐ、ちやんとポイントにならんじょいねー」

## 第九話 当てが外れる事もある

ひゅう太が引き返してきた廊下の奥へ、私はダッシュした。雑魚ならすぐにケリ着けてやろうじゃない。  
エネルギー補給も完璧だし。

右腕も唸るつてもんよ。

だが、一気に引き返したくなる情景が、眼前に広がった。  
暗闇の中から無数に伸びてくる手、手、て、テ……。

一体何本あんのよつ！　てか、何人いんのつ！

スピードはそのままに、私は左へステップしながら身体を低くした。

一本の腕が頭をかすめた。

「ひつ」危ないわねえ。

しかし、腕達は容赦なく私目掛けて飛んでくる。

つたく、満員電車で乗った車両が全員痴漢だつたって心境だわ。

「後ろかつ」

両手を床に着いて、右足を天井に向けコマの様に回した。向かつてきた三本の腕が中空で消える。私は勢いで背中を軸に二回転ほど回った。ダンスかつての。

素早く立ち上がり、未だ腕だけの奴らを交わしながら先へ進む。いい加減、身体も出してよね。

教室にして二つ半進んだ時だった。背中に衝撃が走った。

押されたというよりは、アメフトでタックルされた感じ。された事無いけど、それほどの衝撃つて事。

私の身体が空を舞つたのも束の間、すぐさま床に叩き付けられた。「つたあ」落ちた場所にガラスが無かったのは運がいい。身体を起こし振り返る。

そこに居たのは大男だった。

強そう……それが彼の第一印象。

「えつと……初めまして」作り笑いを浮かべ挨拶してみた。

が、その大男は表情一つ変えずにパンチを繰り出して來た。

あは、やつぱり。バックステップする私。今までいた場所に穴が開いた。

大男がゆっくつとしたモーションで上半身を起こしてゆく。

「ちゃんす」

私はすかさず右に飛び、横から足をへし折ろうと蹴りを繰り出した。

貰つた！

だが、手応えがない。

奴が寸前で私の蹴りを交わしたのだ。しかも、ただ交わしただけではなく前方へ位置をえていた。つまり、穴の向こうへ。今まで私が居た所に奴は居た。

やるじゅん大男。アンタは今から『本馬満』に決定。

「ぴゅう太~つ居る~つ？」

「は~い何でしうか

あいつって奴は……声はすれども姿は見えずつてか？　しかも声遠いし。

「アンタ、もう少し近くに来たらどうなのよ

「遠慮させて頂きます~」

即答ですか？　幽靈なんだから少しふくらこお慮されてもいいんじやない？

まあいいわ。

「この本馬満なんだけどさ

「誰ですって？」

「ホンママンよ」

「ああ、ijiからでも見える大男の事ですか？」

「そう」

「また勝手に名前付けて」

「んな事はどうでもいいのよ」

「はあ」

「それより、ここつけてポイントになるわけ？」

「わかりません」

「またきつぱりと言つわね。

「あの、お嬢さん？」頭上から声がしたが、

「つさいわね。今忙しいの、後にして」「払う様に私は言つた。

「あのう……」再び頭上。

「今すぐ調べてつ！」私はぴゅう太に叫ぶと「はい」とだけ返事が返ってきた。

「で、わっかから何よ」と頭上に目をやつた。

そこには、本馬満が私を見下ろしていた。

「えつと……は、はう、あはは」今度は右手を軽く上げて小首を傾げてみた。

が、右膝が空氣を切り裂いて勢いよく向かってきた。

やつぱそうなるわけえ。

くそつ、今度は間に合わない。右手に左手を添えるよつこ、私はその飛んでくる膝を鳩尾付近で受け止めた。

とは言え、体格差は明白。両足が軽く浮くと、一メートル程飛ばされた。

右膝を付き、上半身を起ししながら、

「か弱い女の子に何て事すんよつ」

「か弱い女は、俺の蹴りを受け止めはしないが」「え？」

こいつ、言葉が通じる。なら説得出来るかも？

なら、答えは簡単。

「あの、大人しく成仏してくれない？」

「断る」

いやあん~こつちも即答~。

「そこを何とか……ね？」目一杯可憐く、両手を合わせてお願いのポーズ。が、

「断る」

「何でよ。あなたも成仏したいでしょ？」

「俺は、俺より強い奴に負けるまで成仏する事は無い」

「あそ、じや私には無理ね。そゆ事で今までの話は無かつた事に踵を返し、背を向けようとした瞬間肩を掴まれた。

「そ、うはいかない

す、素早い。

「何でかな……かな？」肩の手を振り払い言った。

「ここで会つたのも何かの縁だ。俺と戦え」

無茶言つたこいつは。第一、ここに私が戦つて何の得が有るつて言つたよ。

断固拒否よ、拒否。

「嫌よ」

「俺を倒すとボーナスポイントが付くが

「うつ」

ボーナスポイント……何て魅力的な言葉なんでしょう。ちまちまとポイントを貯めるより、効果観面。まさに、ビッグチャンス！

どうしよう、気持ちが揺らぐわ。

とは言え……私は本馬満をチラ見した。やっぱデカイ、バカが付くほど。

でも、ハンデ戦ならいけるかも？

「ねえ、物は相談なんだぞ」

「何だ」

「ハンデくれるなら考えてもいいわ」

「ハンデ？」

「そう、どう考えたってこの体格差は反則でしょ？」

本馬満の目の前に立ち、背伸びしながら身長差をアピール。

「うむ、確かに

お、いい反応。もう一押し？

「例えば、あなたがＫ１ルールで私が総合とか

「ん~」腕組みをして深く考える本馬満。

よしよし、これは行けそうな気がする。相手が打撃系なら捕まる

心配無いし。何より寝技が無いのがいいわ。

「どう?」

「いいだろう

っしゃ。

廊下は狭いし、天井も低い。体格が大きければ不利な要素は結構ある。ボーナスポイントは頂いたようなもんよ。

何で思いを巡らせていた所に、

「ではこっちで、正々堂々と勝負だ」

「はい?」

本馬満は、月明かりが微かに差し込む廊下の壁に向かって右腕を大きく振り上げ、思い切り下ろした。足下が強く揺れると、壁には大きな穴が開いていた。

まさかとか思うけど……。

「ここは狭い。外で心おきなく勝負をしようではないか

「ま、まじいつ~!」

当てが外れたわ……どうしよう。

## 第十話 いうなつたら勝ちに行くしかない

風穴を潜つて外に出ると、そこそこ広い場所になつてた。  
よりによつて何で広いかな。月明かりは一層明るいし……忌々しいつたらない。

私は周囲を見回した。やつぱり広い……グラウンドかつて一瞬思つたが違うようで、校門から生徒玄関までの区間を広く取つているようだつた。

少し離れた所に、私が進入した生徒玄関が見えた。足下を見ると、本馬満の影が私の影と重なつていた。幽霊のくせに影があるなんて、ナンセンスだわ。

外で見ると、改めて彼のテカさが際だつていた。対峙してるだけでも圧倒さそうだつてえのに、これから一戦交えようつてんだから……。

「で、勝負の勝敗はどうやってつける?」

左手を腰に当て余裕の表情を見せつつ、一応聞いてみる。ホントは余裕なんてない。

「完全決着」

スペツと来たわね。

そうだとは思つてたけど。ちょっとは考えるとか無いわけ?

「時間制限は?」

「無制限一本勝負」

いよいよピンチに拍車が掛かつたつて感じだわ。

こらこら、親指を立てんじゃないわよ。しかも何よその笑みは……勝つ氣満々でわけ? ちょっとむかつくわ。

「マジ?」

「ただし、夜明け前までに決着が付かない時はボーナスポイント無しだ

「はい?」

ちょい待て、今さつき無制限とか言つてなかつた？ しかも、疲れ果てた挙げ句にポイントも貰えないなんて事になつたら冗談じやない。どうしよう、ここで止めるつて手もあるけど……すんなり受け入れてくれるかしら。

「棄権してもよろしくて？」

「無効だ」

「ちつ」

言葉使いを変えてもだめだつたか。即答のうえに無効つて何よ。腕時計をチラリとのぞき見た。勝負するしかないとなれば、このまま考えてても仕方ない。私は覚悟を決めた。

深呼吸をして、二歩下がつた。その動作に本馬満がニヤリと笑う。「何時でもいいぞ」

右手人差し指で挑発しきる。

その余裕、絶対に後悔させてあげる。

まずは先手必勝。私は正面から突っ込んだ。それが意外だつたのか、彼は驚きの表情を浮かべた。

が、遅いつ。私は直前で左にステップし彼の右側へ。丁度右斜め後方に位置した瞬間、左足を軸に彼の右膝目掛けてロー・キックを御見舞いした。

「痛つ！！」

強烈な、ほんと激痛とはこのこの事よつてばかりの痛みが走つた。その場に崩れ落ちるわけにはいかない。何たつて、大きな手のひらが左側から、私目掛けて迫つてるんだから。

私は左足で地面を蹴つて後方へ交わした。頭上を掠めるように手のひらが通り抜けた。その後その風圧が私へ届く……なんて威力、あんなのまともに食らえない。

少し痛む足を引きずり、私は立ち上がつた。そして彼の方へ視線を向けた。

「ちつ、ニヤケてるし……余裕つて事？」

「どうした、その程度か？」

「まさか、今のはほんの挨拶代わりよ」

「ふふふふ」

嫌な笑い。ああは言つてみたけど、さて次はどうしよう。膝から崩せば何となると思つたけど、そう簡単にはこきそうにないわ。大体にしてリー・チが違ひすぎる。

ああ、飛び道具が使えたならあ。

なんて、夢みたいな事考えたって仕方がない。今はこの状況を打破しなくちゃ。

「来ないなら、じつちから行くぞ」

「へ？」

「ちょっと待つてえ。じつちも都合つてもんがあるわよ。

と、思いを巡らせる間もなく本馬満が巨漢を前後に一度揺らす。そして私を見下ろすように上体を後ろに反らしたかと思つと、刹那。その反動を使うかの如く前方へ跳ねた。一枚の大きな鉄板が迫り来るような、そんな感覚で私へと一気に距離を縮める。

早っ！

ほぼ直立のまま跳んでくるもんだから、迫るのは頭と言つか顔だつた。

どうする？

思考を巡らせる事コソマ数秒。私はその場にしゃがみ、迫り来る顔を一瞬睨みつつ上方へ飛び上がつた。勿論タイミングを見計らつて、と言いたい所だつたけど、殆ど偶然。間一髪つて言つた方が正解かもしれない。そんなタイミングで私は彼の頭のてっぺんに手を着いた。丁度飛び箱を跳ぶ感じで。

綺麗なフォーム。端から見たらきっとそう見えたに違いない。私はそんな事も思いながら、更に高く上に跳んだ。前方へ押し出す様に体重を移動させ、身体を伸ばし捻る。決まつた、ムーンサルト。着地も決めて、振り返つた。同時だつたのだろうか、彼もこっちを見ていた。

「まさか飛び越えるとはな」

「思いもよらなかつた？」

「そうだな……だが」

「逃げてばかりじゃ勝てない、と？」

「まさしく

「そうね」

分かつてゐるわよそんな事。あの巨体でのスピード。反則だわ。最近のゾンビは、全速で走るような時代だつて思つてはいたけど、どんなドーピングしてんのよつたく。

時計に目をやつた。もたついてはいられない、駄目でも何でも、まずは奴を崩さないと。膝は駄目だった。次はボディか……行くしかないわ。

彼に向かつて私はダッシュした。右拳に靈力を溜めた。

「だああああっ！」懐に飛び込む。

左手が振り下ろされた。更に深く踏み込んでそれを交わす。間髪入れず右手が迫る。一步引いてそれも交わした。

「食らえッ」

再び踏み込んで右拳を鳩尾へ叩き込んだ。

「ぐふっ」本馬満の身体がくの字に折れた。

よし、手応えありつ。続けて左も、と力を込めた。だが、下方から緊張が走つた。

「つな、膝！」

急遽出しかけていた左手を、彼の右膝に目標を変えそこに手を着いた。同時に彼の腹を右足で蹴り、後ろへ跳ねた。したたか地面に背中を打ち、転ぶように交わした、私が上半身を起こすと、奴がまたまた嫌みな笑みを浮かべていた。

「よく交わしたな

「反射神経は良い方なの」直ぐさま立ち上がり息を整えた。

「今のは中々良かつたぞ」

まさか効いてない？ そんなはずない。あの時見せた苦悶の顔は本物だつた。それじや、回復が驚異的つて事？ だとしたら単発で

は無理だ。コンボ攻撃。それも、回復が追いつかない位の攻撃を叩き込まないと勝てない。

どうする？ やっぱりこゝは更なるエネルギー補給が必要ね。

「ひゅう太～いる？」

「何でしじう志保さん？」

ふつと私の右隣に姿を現す。

「エネルギー補給よ」

「コレですね」

「そう」

私は新しいホテチを受け取ると、それを開封した。

## 第十一話 風穴三姉妹、見参！

開封すると、お氣に入りの香りが鼻孔をくすぐった。この色といい、形といい、やっぱりポテチはコンソメよねえ。私は彼の動きを警戒しつつ、ポテチを目一杯口へと放り込んだ。口の中一杯に広がる何時もの味、力が底から湧き上がってくる。

チラリと彼を見た。

相変わらずのデカさが更に際立っている。エネルギー補給したとは言え、本当に勝てるのか……不安が頭の中を駆け巡った。

兎に角、ここをどうにかしないと先は無いってわけだし。

「美味そうだな、それで準備はできたか？」

本馬満がゆっくりとした口調で言った。その言葉の裏には余裕さえ感じられた。

何ぞ、お菓子食べた位で状況は変わらないって思ってるんでしょ。絶対後悔させてあげるから。

パリツ、私はちょっと大きめの一枚を口に入れると、残りをぴゅう太に渡した。

「湿気らないようにちゃんと管理するのよ」

「分かりました」ぴゅう太は、ふつと姿を現しそしてすぐさま消えた。ただ、袋は消える事が無いので消える意味があるのか疑問に思つたが……。

でも、知つててやつてんなら天才だわ。

「お待たせ」私は軽くウインクしてみせた。

「じゃ、続きを始めようか」本馬が指を鳴らした。

「望むところよ」

私も軽くファイティングポーズをとつて見せた。にしても、ホントどうしようかしら……。相当強力なコンボ技じゃないと倒す事な

んて不可能だわ。

飛び道具はレベル不足だって言つてたけど、結局レベルも曖昧だし。

もしかしたら、頑張れば出るかもしねれない。  
流石に、指先から出すのは無理かもしねないけど。

あとは『気合』。

「それじゃ……行くわよっ！」

私は深呼吸し、一気に間合いで詰め、目前で地面を思い切り蹴つて高くジャンプした。

狙いは首。上半身を捻り、その反動で足を水平に回した。  
後ろ回し蹴りで踵をヒットさせるつもりだった。

が、やっぱ敵も素早い……見事に防御。

ちつ、思わず舌打ち。

体制上、後ろ向きで着地する形なった。瞬間、背後に何か迫るモノを感じた。

ヤバし。左ローキックが私目掛けて飛んできていたのだ。  
咄嗟に右に転がり間一髪で交わした。

「フフ、よくぞ交わしたな」

本馬は繰り出した左足をゆっくり戻し、不適に笑った。何よ何よ  
その笑みは、絶対馬鹿にしてるって感じだわ。

嫌な奴。

上が駄目なら。

「今度は……」私はさつきと同じように間合いで詰めた。そして以前で又も飛ぶ様に見せて、実は。

「かの破壊王が得意だった。水面蹴り！」

一気に体制を低くしクルリ駒の如く回転した。そして、本馬の足

元をすぐう様に下から思い切り蹴り上げる。

「何つ！」グラリ巨体が揺れた。と言つより、私目掛けて倒れこんできた。

チャンス！ 私は手を地面に着き、一度逆立ちするような格好で口ケツトの様に本馬の顔面目掛けて飛び出した。

「ぐおつ」顎にヒツト。本馬の上半身は上方に跳ね上がった。どんな屈強な男でも顎は弱いと聞いたけど……アレ、違つたっけ？

まあいいわ、取り敢えずかなり効いてるみたいだし。

巨体が地面に崩れ落ちた。

さあて、ここから一気に畳み掛けるわよ。

と、勢いに乗ろうとした刹那。

「ぬおおおおつ！」

「えー？」

地鳴りのよくな咆哮が私の耳を貫いた。全身がビリビリ響くよう

な感覚にとらわれる。

何よ、まだまだ動けるって訳？

「今のは効いたぞ」言いながらようと立ち上がりてくる。

何つうタフさよ。

でも、今ならイケる可能性が出てきた感じ、迷つてゐ暇は無い。行くわよ 完全に立ち上がる前に仕留める。

私はダッシュし、腹部目掛けてジャンピング一撃を食らわせた。着地と同時に右フックを力一杯入れる。そして、それをキャンセルしたつもりで……。

「竜巻旋風脚つ（ホントはただの回し蹴り）」

「ぐおつ」

さあ、トドメの一撃！ 今の私ならきっと出来る、伊達にD.B全巻読んでないんだから。私は三歩下がり、靈力を両手に集めた。

「カ～メ～は～

「な、何を」

「マンね～～んつ堂つ！」

突き出した両掌から放たれた靈氣は、固まりとなつて本馬の鳩尾を直撃した。

巨体はぐの字に折れ、再び前のめりにゅっくり倒れ込んできた。廃業した風呂屋の煙突が倒れるが如く……そうだ、帰つたらシャワージやなくて、お風呂入りたいわ。

倒れた本間に恐る恐る私は近寄つた。流石に、もづ立ち上がってこれないでしょ。

一步下がつた所で立ち止まり、彼を見下げた。俯せに倒れている彼の首が僅かに持ち上がつた。思わず後ずさつた……が、しかし。

「ま、まさか飛び道具とは……」

「恐れ入つたかしら？」

「ふつ、見事……だつた」

「ありがと」

そう言つと、彼の巨体は闇に消えていった。

はあ、やつとボーナスステージクリアね。私はその場にペタリと座り込んで、空を仰いだ。途切れ途切れに流れる雲が、月を隠そうとしているのが見えた。

「さあて」一息吐き今度は地面を見つめた。すると、その地面からぴゅう太がぬつと姿を現した。普通なら心臓が飛び出す位に驚く所なんでしょうけど、放心してゐるのか普通に受け入れてゐる自分がそこにはいた。

「いよいよ三姉妹と対決ですね」

「疲れたから帰るわ」私は立ち上がり、そそくせと歩き出す。その動きに合わせて、ぴゅう太が私の正面をフワフワと浮遊しながら着いてきた。

「えへー！ それ、本気と書いてマジですかっ！」

「これから二人も相手に出来ないわよ」

「そんな事言わずに、何の為にここまで来たんですか」

心底困った顔をするぴゅう太。あら、ちょっと可愛いかも。でもねえ、やっぱ厳しいわよ。

「ほら、また出直して来るつて手もあるじゃない」

「それじゃ、困ります」

「そうは言つけどさあ……」もつ一度空を仰ぎ考えてみた。既にやり切つた感が満載なのは拭えない。雲が月を隠し、闇が深くなつてきているように感じた。

「でもう」

とか、やり取りしてる時だつた。一人の間を風が通り抜けた感覺に襲われた。歩を止め、その抜けた先に視線を移す 丁度真後ろ。「何時まで待たせるつもりなのかしら」

巨体の消えた少し先に、三つの人影があつた。その誰かが発した言葉だと思うが、何処か感に障る口調。

「まあまあ、押さえてお姉ちゃん」

向かつて左側の影が、真ん中の影の肩を叩く仕草が見て取れた。て事は、真ん中がボス？ ゲシッ、直ぐさまローキックが左側の影に飛んだ。影が崩れ落ちる……「わあ痛そつ。

「何度言つたら分かるのコイ？ コカお姉様とお呼びと言つてるでしょ」

「ごめんなさい、コカお姉様」

「コイにコカ？ ……まさかとは思つけど、会わずに帰らうと考えたた例の三姉妹？」

「それよりも、そこの貴女！」

「え？ 私？」唐突に呼ばれて、びっくりの私。少しほは心の準備もさせてよね。

「貴女以外に誰がいらっしゃるのかしら？」

にしても、その言葉使いヤメテツ、鳥肌が立つてくる。姿が見えない分余計に腹立たしい。それにあのシリエットからして、きっと私の事を指差してゐるんだろうけど……よく見えない。

ま、兎に角今は。

「じゃ、そゆ事で」私は右手で手を振り、何事も無かつた様に再び歩き出した。

「ちょっと待てーい！」

今度はまた違う声が響いた。

三人目か。

「何よお」振り返りもせず歩だけ止めた。

「おのれは、ユ力お姉様を無視する気かっ！」

うげつ、怖つ。しかし私は歩を進めた。関わりたくない一心で、それはもう何事も無かつたように平静を裝つて。

「待たんかいつボケッ！」

何か叫んでる。

が、無視無視。

「志保さん、呼ばれてますけど」ぴゅう太が私と後ろを交互に見て、おろおろしている。

「黙つて着いてくるのよ」

「でも、折角向ひから出てきてくれたんですよ」

「いいからっ」

「待て言つとるやうつー..」

完全無視。

「.....お願いだから待つてよお」

いきなり半泣き？ それともフェイク？ ともかく、負けたわ。

「はあ」溜息を一つ吐き、私は仕方なく止まつて振り返った。

「やつと止まつたな」

何故上から目線 まあいいわ。

月を覆っていた雲が切れ始め、徐々に辺りに光が差し始めていた。

「ささ、ユ力お姉様。続きを」

「私達を目の前にして、無視するとはいひ度胸ですわね」

「別にそんなつもりは.....（あつたけど）」

「ふん、ますます不愉快ですわね

「で、何？」

「な、何って.....貴女、何時まで私達三姉妹を待たせるおつもりでしたのか？」と聞いているのよ

ああ、やつぱり本命の三姉妹だったか。出来るなら会いたくなかったわ。ましてや、直々に登場しちゃうなんて。ツイているのか、いないのか……微妙な感じ。

「別に待たせるつもりは無かつたわ。ただちょっとしたトラブルが起きちゃってね」

「トラブルですって？」

「そうトラブル」

「兎に角、帰りたければ私達を倒してからにしてほしいですわね」出来れば関わりたくないから、こうして帰ろうと思つてたわけなんんですけど。

でも私の苦笑を余所に、三人のテンションが上がってきてるようすで。

「私の名は、風穴ユカ……人呼んで折り紙のユカ！」

月光の元にその姿を現した彼女は、ポニーテールにちよつと下膨れな顔。

折り紙って、それで何するつもりなのよ。

「ぴゅう太？」私はその場に体育座りして、ぴゅう太を呼んだ。「何でしじう？」

「さつきのポテチ残ってるわよね？」

「あります……けど」

小首を傾げ、丁寧に開け口を塞いでいる袋を見せて言った。

「こっちにくれる？」

「はい？」私はぴゅう太から袋を受け取ると、再び手を入れて不揃いのチップを口へと運んだ。三姉妹の名乗りは続いていた。

「同じく、アタイは風穴ユマ……リリカルのコマ一。」ロングヘアーで、凛々しい顔立ち。

でも、ホラ、間違ってるよソレ。手に持つてるのはビーフ見ても編み棒だし。

「最後に、私はユイ、風穴ユイ……えっと、ハイパーヨーコーのコイ！」

ショートカットに可愛い顔。ちょっと天然な感じがするわね。  
にしても、うわあ綺麗、光ってる。

で、みんな揃いのセーラー服に……スカート丈長っ。

「風穴三姉妹、見参っ！」

ハイハイ、ポーズまで決めてくれちゃって。

「ちょっと貴女！」

「あ、終わった？」丁度袋の中身も無くなる寸前だった。  
「何処までもバカにして でもその余裕、何処まで持つかしらね  
「え？」

途端に三人が三方に散った。

ヤバッ、速い！ 私は急いで立ち上がった。  
正面にユカ しかし、左から衝撃が来た。  
手に持ったポテチが吹っ飛んだ。

視線を移す。

ユマだ。彼女が私の腕に蹴りを入れていた。  
「くつ」油断した。だが、続いて背中に衝撃。  
正面はユカだ、だとすると ヨイ？ 息が詰まる。  
前のめりになつた所に、ユカの脣の端が僅かに上がる。  
「ぐはっ」腹部に強烈なパンチを食らつた。  
そして、三人は直ぐさま私から離れた。

ヒット＆アウエイつて訳ね。

腹部を押さえ、三人の姿を探した。

頭に来るくらい素早いわね。もう元の場所に戻つてるし。

「大丈夫ですか？ 志保さん」

ぴゅう太がスッと現れ、私の側で心配そうな顔を浮かべた。

「駄目そう、流石に忍者の末裔」

「頑張つてください」

無責任な応援ありがと。

にしても、三対一はかなり不利だわ。

「どうでして？ 私達の連携は？」

ユカが腰に右手を当て、血漬けに言い放つ。

「卑怯だわっ！」

痛さを堪え、私はユカに向かつて指差し叫んだ。

「何ですって」

「か、か弱い女の子に三人掛かりで来るなんて、卑怯の何者でもないと言つてるのよ」

「なら、一対一で……」

「ユカお姉様っ」

「何ですのユカマ」

「奴の口車に乗っちゃ駄目だ」

「！？」

「奴はアタイらをバラバラにして、タイマン勝負に持ち込もうとしてるんだよ」

「何んですって！」

「ちっ、あいつが一番バカそうだと思つていたの。アンタの魂胆は、ビシッとバビッとお見通しだよっ」

「仕方ない　　か

私は気合いを入れ直し、拳を握った。

見上げた空は、未だ月が高い所に浮かんでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4775f/>

---

ばてちはコンソメ・右パンチ！

2010年10月10日14時09分発行